



「みたまのふゆ」とは、私共が常に蒙りいただいております大神様の恩徳、加護、御神威を尊称した言葉です。人間は自分ひとりの力で生きてゐるのではなく、つねに「みたまのふゆ」をいただいで、生かされてゐるのです。

源実朝の献詠和歌について

「金塊和歌集」を編み、歌人としても知られる鎌倉幕府三代将軍の源実朝が瀬戸神社に奉献した和歌が伝承されてゐます。

瀬戸神社宮司佐野家の古文書の中に「聞書前後不同記」といふ文書があります。正徳ころに、瀬戸神社のことに限らず、金沢八景地域全般の由緒などさまざまな記事を、表題にもあるやうに「前後不同」に綴ったものです。江戸など各地からの参拝客に、金沢八景の歴史などを説明するための手控へとしてまとめられた小冊子なのでせう。

このなかに「建保六年戊寅鎌倉右大臣御願ノ事有テ瀬戸三島大明神ト豆州走湯ノ権現ヘ祈セイシ給フニ早速御成就ニ付テ定恩法印ト云フ山伏ヲ御代参ニ立テ給フトテ」との前置きにより

- 泊戸明神へノ御歌
- ワタツミノ泊戸ノ社ノ神垣ニ
- 願イゾ満ル潮ノマニマニ
- 走湯ノ権現へノ御歌
- 走湯ノ神トハムベモ云ケラシ
- 早キシルシノ有レバ成ケリ

と記されてをります。いかなる祈誓が成就したのかは不明ですが、この年右大臣に任官してゐます。写真は前宮司の筆による実朝公献詠和歌の扇面です、昭和五十四年の御鎮座八百年祭の記念品です。

平成三十一年祭事暦

○一月 一日 歳旦祭

○ 鶏鳴神事

○ 三月 二一日 春季大祭

○ 祈年祭・合祀神例祭

○ 五月 一五 日 例大祭

○ 神社本廳献幣使参向

○ 琵琶島弁天社へ神輿渡御

○ 四月 二九 日 昭和祭

○ 六月 三〇 日 大祓式

○ 大祓人形納め・茅の輪神事

○ 七月 七日 天王祭出御祭

○ 本社神輿御霊入・宮出渡御

○ 七月 九日 三つ目神楽

○ 無形文化財湯立て神楽

○ 七月 一四 日 天王祭巡幸祭

○ 天王神輿町内巡幸

○ 七月 二一日 手子神社例祭

○ 九月 一日 浅間神社例祭

○ 九月 一七 日 熊野神社例祭

○ 無形文化財湯立て神楽

○ 一〇月 一三 日 手子神社秋祭

○ 無形文化財湯立て神楽

○ 一二月 二三 日 秋季大祭

○ 新嘗祭

○ 二月 八 日 歳の市

○ 開運熊手授与

○ 二月 三一日 大祓式

○ 大祓人形納め・古札焼納式

○ 毎月 一 日 月次祭

○ 五月 踐祚奉祝祭、十月 御即位奉祝祭、十一月 大嘗祭奉祝祭を予定)



大正四年の御即位大禮の繪圖で見る

天皇陛下の御即位と大嘗祭

平成三十一年には四月末日をもって今上陛下が御譲位あそばされ、翌五月一日に皇太子殿下が新帝として御即位になられることが発表されてをります。

新たに陛下が即位される時の儀式や行事について先例の繪圖を見ながら解説してみます。先例を参考にと言っても、今回の「御代替はり」は御譲位によるもので、この点で近年の事例と異なります。

平成の時も、昭和天皇が一月に崩御され、二月に御大葬があり、一年の諒闇(一般の喪中)の期間が過ぎて、平成二年の秋に即位礼・大嘗祭がありました。喪中であっても天皇の位が空位ではないので、直ちに「三種神器」を継承します(「劍璽等承継の儀」)。ふるくはこれを踐祚と称しました。また元号を制定します。そして、

喪明けを待って「即位の礼」と「大嘗祭」があるのです。

即位の儀式は①劍璽を継承する踐祚の儀、②即位を宣言・告知し、国民のお祝いの言葉(これを「寿詞」といひます)を受けられる「即位の礼」、③即位後、最初の新嘗祭を特別に国民とともに齋行する「大嘗祭」の三つが主要な行事となるのです。さらにこれらの行事の前後には、宮中の賢所、伊勢の神宮、神武天皇や先帝四代の山稜などに、あらかじめ期日を奉告したり、無事に終了したことを感謝する数々の神事も伴います。

古代の「大宝律令」などの定めにも、天皇が即位したときは、まず天神地祇を祀れとされて、天皇のおつとめの基本が祭祀であることが記されてあります。先年の今上陛下のお言葉のなかにも、「象徴としてのつとめ」として「祈り」があることがくりかえされてをりました。今日も天皇の御位は祭祀を行はせられることに基づいてあるのです。

掲載の写真は、どれも大正天皇御即位の時に印刷された繪圖

です。上の写真は「即位の礼」ですが、場所は京都御所です。平成の時は東京の皇居正殿でした。前庭に萬歳旗を始め、大小の五色の旗が立ち並び、古式の装束を着けた威儀参役者が居並んでをります。

正殿中央には高御座が置かれ、これに黄櫨染御袍という、天皇のみがお召しになる装束を着けられてお昇りになり、即位の「おことば」を奏されると、総理が御前に進み、国民を代表して「寿詞」を申し上げ、続いて「萬歳」を三唱します。

明年は十月二十二日と予定されてあります。

大嘗祭は、古来、十一月(旧曆)の中卯の日に行はれる習はしでした。大正・昭和・平成では新曆十一月の卯の日でした。これに倣へば明年は十一月十四日かと思はれます。

春のうちに悠紀国、主基国が決定します。平成の時は秋田県、大分県でした。国民の代表として、大嘗祭で使はれる米と粟をはじめ各種の御供へ等を献上する地方となります。



皇居東御苑に大嘗宮といって、悠紀殿と主基殿といふ二つの建物を中心とする建造物が造営されます。「宮」とか「殿」と名がつきませんが、立派な御殿ではなく、柱は皮をむかない材木、屋根は茅葺き、床は竹簧の子、壁は畳表といふ、簡素な仮小屋のやうな御建物です。

当日の夕闇が深くなる時刻、潔斎のうえ、真っ白な御装束を召された陛下が、写真(左上)のやうな行列でまず悠紀殿に入られます。

悠紀殿の中には御神座があり、その前で、陛下が神々にお供へ物を御手づから差し上げます。悠紀地方からの米と粟による飯と粥、白酒、黒酒のほか、鮮物、干物、果物、薬物など様々なものがああります。これは、柏の葉を竹ひごで綴って作る箱や素焼きの器に入っています。陛下は、これを竹の箸で取り分け、柏の葉のお皿の上に乗せて御供へし、最後にご自身でも召し上がられる作法があるのだと承ります。

悠紀殿の儀の後、午前零時を過ぎると、翌日の暁の儀である主基殿の儀が始まります。

同様にして、主基殿にお出ましになられる陛下が、主基地

方からの御供へにより全く同じ儀式が繰り返されます。柏の葉をお皿にして、これにお供へものを載せることなど、本当の古代の祭りの姿がここには残されてをります。

絢爛豪華な祭りの姿は全くありません。ひたすらに清楚にして神々に仕へるといふ、日本のまつりの原点を見るごときであり、それが、天皇といふ御存在の意義を示すお姿であるとも申せませう。

また、大嘗宮には悠紀・主基両地方のみならず、全都道府県から「庭積机代物」としてお供へされます。「大嘗祭」は国民と皇室を繋ぐ意味のある神事であるともいへるのです。

○ 一連の即位の行事の最後は、神宮と山稜への御親謁です。



剣璽とともに、伊勢に赴かれて正装の御装束で両宮の御正殿に謁せられます。

神事に始まり神事に終はるのが、順徳上皇が「禁秘抄」に示された皇室の敬神のお姿でもあり、さらには単に皇室の伝統といふより、我が国の文化の本質であるとも申せませう

瀬戸神社略縁起

大昔、今の泥亀町、大川町、釜利谷町小泉のあたりまで海が入りこみ、柳町や六浦町の塩場、南六浦、内川町内もすべて海でした。そして洲崎と瀬戸の間は、潮の干満時には急流が渦を巻き、容易に渡れぬ難所でした。古代人がここに海神を祀ったのが瀬戸神社の起原で、今から千五百年以上も前(古墳時代)のことです。

治承四年(一一八〇)鎌倉に入った源頼朝が、日頃崇敬する伊豆三島明神をこの霊域に遷祀してからは、六浦港の守り神「瀬戸三島大明神」として鎌倉幕府をはじめ上下の尊信をあつめ、その後、足利氏、小田原北条氏の崇敬も篤く、江戸時代には名勝金沢八景の中心にあつて、百石の社領を有する大社として、江戸の町民の間まで信仰者がひろがりました。

明治六年郷社に列格、戦後は宗教法人となり神奈川県神社廳齋幣使参向神社に指定。現在の社殿は寛政十二年の建造で、昭和四年の屋根を銅葺きに改め、平成二十四年には御屋根替へと修増築の御修葺事業が行われました。

御祭神

大山祇(おほやまつみ)の命

伊豆国三島大社、伊予国大三島の大山祇神社の御祭神と同じ海上交通の神であると同時に、水源地を司る山の神であり、金属、岩石、木材などの建築資材や、森林、鳥獣に至るまで、一切の生活資源は、この大神の恩徳によるものです。

天孫瓊杵尊の御后となられた木花咲耶姫の御父神にあられます。
須佐之男(すさのを)の命

配祀の神の須佐之男命は、天照大神の御弟神で、八俣の大蛇を退治された神話は有名です。自然界、人間界の罪けがれや悪者を追ひ祓ひ、人々の苦しみを除いてお守りくださる神様で、別名を「天王さま」と仰がれておます。七月の天王祭りには大神輿で氏子町内をくまなく御巡りになります。

菅原朝臣道真公

天満大自在天神とも尊称し、一般には「天神さま」と親しまれて呼ばれます。書道、学問、詩文、和歌に秀でてをられたただでなく、至誠、尽忠、孝道、正義、国家鎮護の神さまでもいらつしやいます。

釜利谷町鎮座

手子神社

釜利谷町総鎮守の手子神社は、もとの地の領主伊丹左京亮が、文明五年(一四七三)瀬戸神社の御分霊を宮ヶ谷の地におまつりしたものです。

延宝七年(一六八〇)、伊丹氏の子孫、三河守昌家の子で、江戸浅草寺の智樂院忠蓮僧正が、現在地に遷祀して以来、釜利谷一郷の総鎮守として信仰を集めました。明治六年村社に列格、大正十二年の大震災で倒壊しましたが、同十五年再建し、昭和四十五年には御屋根も総銅板葺きに改修し、一段と御神威を加へました。

御祭神は瀬戸神社と同じく大山祇命、例祭日は七月十七日(現在はその後の日曜日)ですが、十月十五日(前後の日曜日)の秋祭りには、古式豊かな湯立神楽が昔ながらの伝統を守つて行はれます。

境内の洞窟にお祀する竹生島弁才天は、金沢八景のひとつ「小泉の夜雨」の中心地にあつたもので、厄除け、開運の福神として信仰されておます。

朝比奈町鎮座

熊野神社

社伝によれば、鎌倉に幕府を開いた源頼朝が、その東北の守りとして熊野三社をここに勧請したものとひます。仁治二年(一二四一)、鎌倉幕府は朝比奈切通しの開鑿に全力を挙げ、執権北條泰時は自ら現場に臨んで工事を指揮しました。社殿の建立もこの頃行はれたこととせう。

その後、元禄八年(一六九五)、地頭加藤太郎左衛門尉良勝が神殿を再建してから、里人の崇敬を集め、相模国鎌倉郡峠村の鎮守として崇敬されてきました。安永及び嘉永年間には再度の修築も行はれて、明治六年村社に列しました。

昭和五十三年、氏子一同の熱意を結集して、入母屋造、総檜、銅板葺きの本殿を完成、更に平成御大典記念事業として新たな拝殿を建築竣功して今日に至つておます。御祭神は速玉男命、伊邪那岐命、伊邪那美命の三柱です。

例祭日は九月十七日で、昔ながらの古式にのつとつた湯立神楽が今も続けられておます。

谷津町鎮座

浅間神社

谷津の町の鎮守として古来崇敬されてきました。伝説では御堂関白太政大臣藤原道長が当地に來遊、能見堂から金沢の景勝を鑑賞したときに、正面の目下にあるこんもりとした山を塗桶山と名付け、そこに浅間大神を勧請したといはれます。道長の來訪は史実ではありませんので、創建の詳細な時期は不明ですが、富士山信仰が関東一円に広まつた中で当地にも勧請されたものでせう。祭神は富士山の浅間神社と同じ木花之佐久夜毘賣命です。特に安産の御利益があり婦人の崇敬が篤かつたと伝へます。御祭神が天孫瓊杵尊の御后となり、御子神等を出産されたことによるものでせう。

祭礼は六月一日の開山祭と九月一日の例祭。例祭(近くの土曜日)には谷津・東谷津・泥亀の各町内で神輿の巡幸その他の賑やかな行事が営まれます。寛正四年(一四六三)西山松眠といふ医師が神饌田を奉納、以来、例祭には赤飯をお供へし、お下がりは崇敬者婦人が分けたといふこととせう。

瀬戸神社

〒三三六〇二七
横浜市金沢区瀬戸十八ー一四

(電話) 〇四五七〇一九九九二
(FAX) 〇四五七〇一九九九四

<http://www.setojinja.or.jp>